

聖獣 麒麟

— ころろ 優しき 獣の 長 —

令和5年3月18日(土)～9月10日(日)



兵庫県立考古博物館 加西分館
古代鏡展示館
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

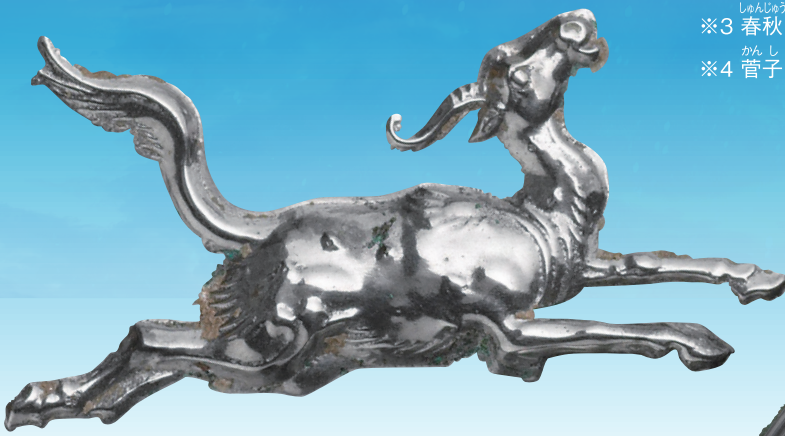
古代中国では人々の崇拝の対象となる想像上の動物「聖獣」が数多く生み出されました。麒麟もそのひとつで、靈獣、仁獣、瑞獣などとも呼ばれています。

麒麟の登場 — 春秋戦国時代 —

麒麟の概念は春秋時代(前8世紀～前5世紀)の中国で成立したとされます。古くは『詩経』※1に「麟」の名で現れ、君主を讃える詩「麟之趾」からは、麟が周の貴公子などにたとえられるような別格の存在と考えられていたことがわかります。

また『孟子』※2には、空を飛ぶ鳥の代表である「鳳凰」と並んで、四つ足で走る獣の代表として「麒麟」が登場します。『春秋』※3では哀公14年(前481年)に「麟」が捕獲されたことが記されており、『管子』※4からは麒麟の出現が吉兆の印と考えられていたことがわかります。

- ※1 詩経 西周時代から春秋時代におよぶ歌謡305片を収録した中国最古の詩集
- ※2 孟子 戦国時代の儒学者である孟子の逸話・弟子との問答等を集成したもの
- ※3 春秋 東周時代の前半(前722年～前481年)の歴史を記した歴史書
- ※4 管子 戦国時代の斉の宰相管仲に仮託して書かれた思想書



瑞獣龍鳳紋鏡(右)と 跳ねる「麟」(上)

唐時代/当館蔵 径 20.4cm 重 2,173g

中央の半球形の鈕の廻りに2羽の靈鳥、2匹の靈獣が鑄出され、外縁には銘文が時計回りに巡っています。銘文に「鸞翔鳳舞龍騰麟跳」※5とあることから、鹿形の靈獣は「麟」に対比できます。さらに「麟」と「麟」が同音の「リン」であることから、この靈獣の図像は「麒麟」と判断できます。

※5 鸞・鳳: 中国の想像上の靈鳥
騰: 勢い盛んに天に昇ること

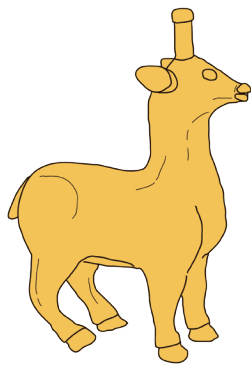


500	中国	麒麟像の変遷
春秋		文字だけの時代
400	戦国	
300		
200	秦	
100	前漢	画像に現れる
BCE	新	
CE		
100	後漢	鹿形のイメージが固まる
200		
300	吳 蜀 魏	
西晋		麒麟と呼ばれる獅子形石獸
400	東晋 五胡十六国	
500	宋・齊・梁・陳 北魏	
600	西魏 北周 東魏 北齊	
隋		
700	唐	鏡の中の躍動的な麒麟像
800		
900	五代十国	
1000	北宋	
1100		
1200	南宋 金	鱗を纏った麒麟の登場
1300	元	
1400	明	
1500		
1600	日本	
1700	江戸	
1800	清	
1900		

図像に現われた麒麟 — 漢時代 —

『春秋』に「角のある麋(小型の鹿)」と文字で記載される麒麟が、図像で現れるのは前漢時代後期(前1世紀)になってからです。

前漢時代に儒教が官学となり、麒麟は儒教の第一の徳目「仁」を持った獣として仁獣と呼ばれるようになります。また『礼記』*6には毛を持った生物(獣)の長として、鳳凰(羽をもった生物の長)・靈龜(甲羅をもった生物の長)・応龍(鱗をもった生物の長)とともに四大靈獸「四靈」と呼ばれていたことが記されています。後漢時代(1~3世紀)に作



鍍金麒麟像(スケッチ)
後漢時代/河南省偃師出土
原品は河南省博物館蔵

られた『説文解字』*7には、「麒は仁獣である麋(大型の鹿)の身、牛の尾をしており一角がある。」と表現されています。この頃の麒麟は、頭上に先端が丸い一角を持ち、鹿や馬の形で表現されています。足先の多くは馬のような蹄(単蹄)ですが、牛のような蹄(2本に分かれる偶蹄)や体に鹿の子模様が描かれている図像もあります。麒が雄、麟が雌と定義されたり、麒麟のイメージの原形が固まるのもこの頃です。

*6 礼記 周から秦・漢時代にかけての礼に関する記述を集めた書物。前1世紀頃に成立

*7 説文解字 後漢時代の許慎が作った最古の漢文字典。後100年に成立

時代とともに変化する麒麟の姿 — 南朝時代以降 —

中国の南朝(宋・齊・梁・陳/5~6世紀)では、墓を守るため皇帝陵の参道に置かれた虎や獅子に似た姿の石像が麒麟と呼ばれています。

8世紀(唐時代)に作られた銅鏡には、頭上にS字形の1本角を持ち、天を駆ける躍動的な鹿形の麒麟が鏡のデザインに取り入れられます。

北宋時代(10~12世紀)の建築技術書『营造法式』(1103年刊行)には、体に鱗を纏った獅子形の獣が麒麟の図案として記載されています。



双獸双鳳紋八稜鏡の麒麟
唐時代/当館蔵

その後、鹿形の麒麟にも鱗が描かれるようになり、姿は龍に似てきます。また角の形や数、蹄の形が変化した様々な図像が出現し、今日私たちが目にする麒麟像に近づいていきます。

麒麟の概念は、日本へは奈良時代には伝わっており、『日本書紀』*8孝徳紀や天武紀では瑞祥(めでたいことが起こる印)として登場します。その後の日本における麒麟像は、中国での変化に合わせて姿を変え、江戸時代には吉兆の図案として陶磁器にも取り入れられています。

*8 日本書紀 奈良時代(720年頃)に成立した日本最古の勅選の歴史書



陶磁器の麒麟模様

①青磁麒麟文筆立(三田青磁) 江戸時代後期

②下絵帖(珉平焼関連資料)
江戸時代後期~昭和時代

③呉州赤絵写魁手鉢(珉平焼)

江戸時代後期~明治時代前期
いずれも兵庫陶芸美術館蔵(①②は田中寛コレクション)